

淀川流域における近代河川舟運の変化に関する地理学的研究 —歴史 GIS データベースを用いて—

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

いづか たかふさ
飯塚 隆藤

本研究は、近代の河川舟運研究への地理学からのアプローチとして、歴史 GIS の手法を用いて、日本のなかでも河川舟運が盛んであった淀川流域を事例に、明治中期から昭和初期にかけての河川舟運の盛衰過程を明らかにしたものである。本研究ではまず、3 点の研究課題を提示した。その第 1 は従来の河川舟運研究では、河川舟運の空間的検討が不十分であり、近代の河川舟運が流域全体を通して、どのように変化し、その変化にはどのような地域差があるかについて明らかにすること、第 2 は歴史 GIS データベースを構築し、それを用いて時空間分析を行うことで河川舟運の盛衰過程の要因を考察すること、第 3 は河川舟運研究における歴史 GIS を用いたアプローチの有効性を検証することであった。

具体的には、まず明治期における全国の河川舟運について概観し、なかでも舟運の盛んに行われていた淀川流域・木曾三川流域・利根川流域の三流域を事例に、舟運の地域差を検討した。流域単位で河川舟運を比較することによって、従来の研究とは異なる視点や舟運の地域差にまで言及し、淀川流域の特徴を位置づけた。次いで実証研究として、淀川流域を対象に、明治中期、明治中期から後期、大正期から昭和初期の 3 つに時期区分し、それぞれに対応する歴史 GIS データベースを構築し、時空間分析を行った。

本研究の成果は、以下の 3 点に集約される。①淀川流域における近代河川舟運の盛衰過程は、Ⅰ期「舟運発展期」、Ⅱ期「舟運再編期」、Ⅲ期「舟運停滞期」、Ⅳ期「舟運存続期」の 4 期に分けられることを提示した。②淀川流域では明治中期から昭和初期にかけて河川舟運の形態が変化しつつも、上流・中流・下流に河川舟運の核となる拠点が存在し、それらが連携し、緊密な関係にあったことが、昭和初期まで舟運を存続させた要因であるという結論を導き出した。③河川舟運研究において、「市郡単位での分析」「市町村単位での分析」「浜・港単位での分析」という 3 つの時空間分析を実施した。その結果、歴史 GIS の有効性について、「全国レベル」「流域レベル」「地域レベル」のマルチスケールで河川舟運を検討することを示すことができた。

以上のように、本研究では淀川流域における近代河川舟運の盛衰過程を解明するとともに、河川舟運研究への歴史 GIS を用いた研究アプローチの有効性を明らかにすることができた。